

遺骨収集事業への参加

千葉県隊友会 市川支部長
金井 泉寿

一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会（推進協）は、国の行う戦没者の遺骨収集及び関連する事業に対し、必要な協力を行うことにより、これらの事業の促進を図り、またこれらの事業を通して遺骨収集に関する諸外国の理解の促進及び国際親善の増進に寄与することを目的として平成 28 年 7 月 1 日に設立されました。協会は厚生労働省から遺骨収集業務を行う唯一の法人として指定を受け、社員団体には（一財）日本遺族会、（公財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会、（一財）全国強制抑留者協会、東部ニューギニア戦友・遺族会、全国ソロモン会など 12 の団体があります。

推進協は隊友会に遺骨収集事業への人員の差し出しを要請し、今回私が東部ニューギニア現地調査（第 1 次派遣）に参加をしたので、その概要を報告します。

期間は平成 30 年 6 月 9 日（土）から 6 月 16 日（土）の 8 日間で日本からの参加者は推進協職員 2 名、遺族会 1 名、隊友会 1 名の 4 名でした。

調査場所は南海支隊と豪軍の戦闘地域であったエオラクリークでした。

【当時の状況】

南海支隊とは何か？

南海支隊は 1941 年（昭和 16 年）11 月 15 日、第 55 歩兵团司令部、歩兵第 144 連隊、山砲兵第 55 連隊第 1 大隊、第 1 野戦病院などにより堀井富太郎少将を長として編成された。支隊は開戦後、グアム島攻略、ラバウル攻略に従軍。1942 年（昭和 17 年）7 月に始まったポートモレスビー作戦の担当となり、第 5 師団から歩兵第 41 連隊と、マレー作戦に投入された独立工兵第 15 連隊が追加配属された。

では南太平洋の作戦を振り返ってみよう。

1942 年（昭和 17 年）4 月のドーリットル東京空襲により防衛圏の更なる拡大を決意した日本は、東にミッドウェー、南にニューギニアのポートモレスビーの占領を企図した。ポートモレスビーの占領は、当初、珊瑚海海域を制圧、海路で行い、その結果、ソロモン諸島を勢力圏に収め、米豪遮断を図る一連の作戦の一部であったが、珊瑚海海戦は、予期の通り進展せず、結局、ポートモレスビーは、陸路で占領することとなった。同年 7 月 21 日、道路建設や偵察を任務とした独立工兵第 15 連隊基幹の先遣隊が東部ニューギニア東北のゴナに上陸、続いて 8 月 18 日に歩兵第 144 連隊基幹の南海支隊主力がバサブアへ上陸、先遣隊と合流し、後続部隊も参戦しポートモレスビーに向かい前進を開始した。

バサブアからポートモレスビーまで直線距離は約 220km だがオーエンスタンレー山脈（最高峰の標高 4,000m、作戦地域の通過峠は約 2,000m）を超えなければならず、同山脈は密林に覆われ、道はなく、険しい斜面を持つ山々が連なり、河川は急流で前進は困難を極めた。

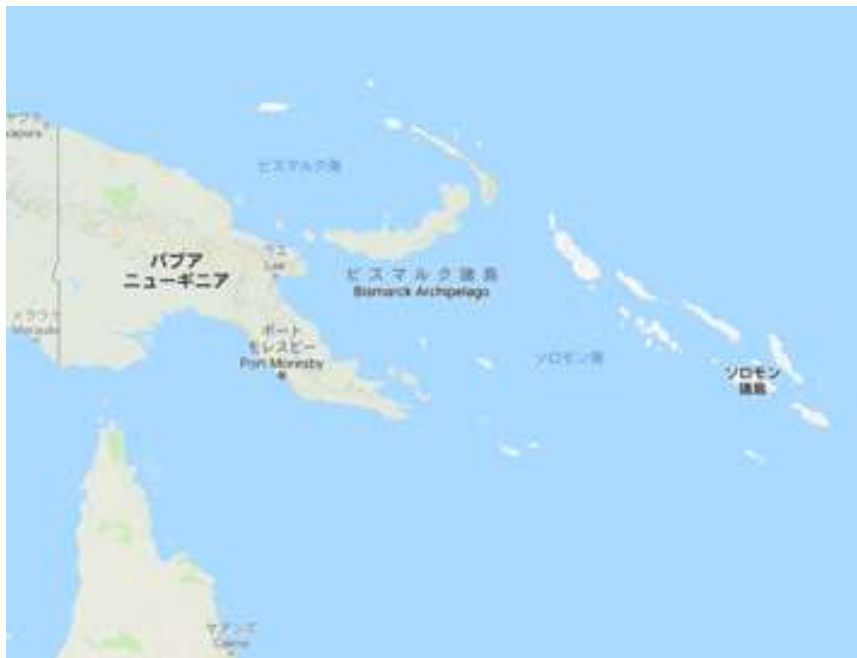
南海支隊は、補給の拙劣と逐次強まる豪軍の抵抗に遇い、9 月 13 日、ポートモレスビーまで約 50km の地点まで前進したところで撤退命令を受領し、9 月 24 日に撤退開始、豪軍は 9 月 28 日本格的に攻勢を開始、日本軍はもと来た道を豪軍の攻勢を受けながら当初のバサブアに向かうことになった。

この作戦に投入された日本軍将兵 1 万 1,000 名のうち 7,600 名が戦死あるいは戦病死し、ブナ、ゴナ、ギルワにおける日本兵の捕虜はわずか 200 名から 250 名余りという結果となった。この後も戦力を投入し 3 年余にわたるパプアニューギニアの作戦は約 15 万の将兵のうち 12 万余の戦病死（ほとんどが飢餓と病気）と言う結果に終わった。

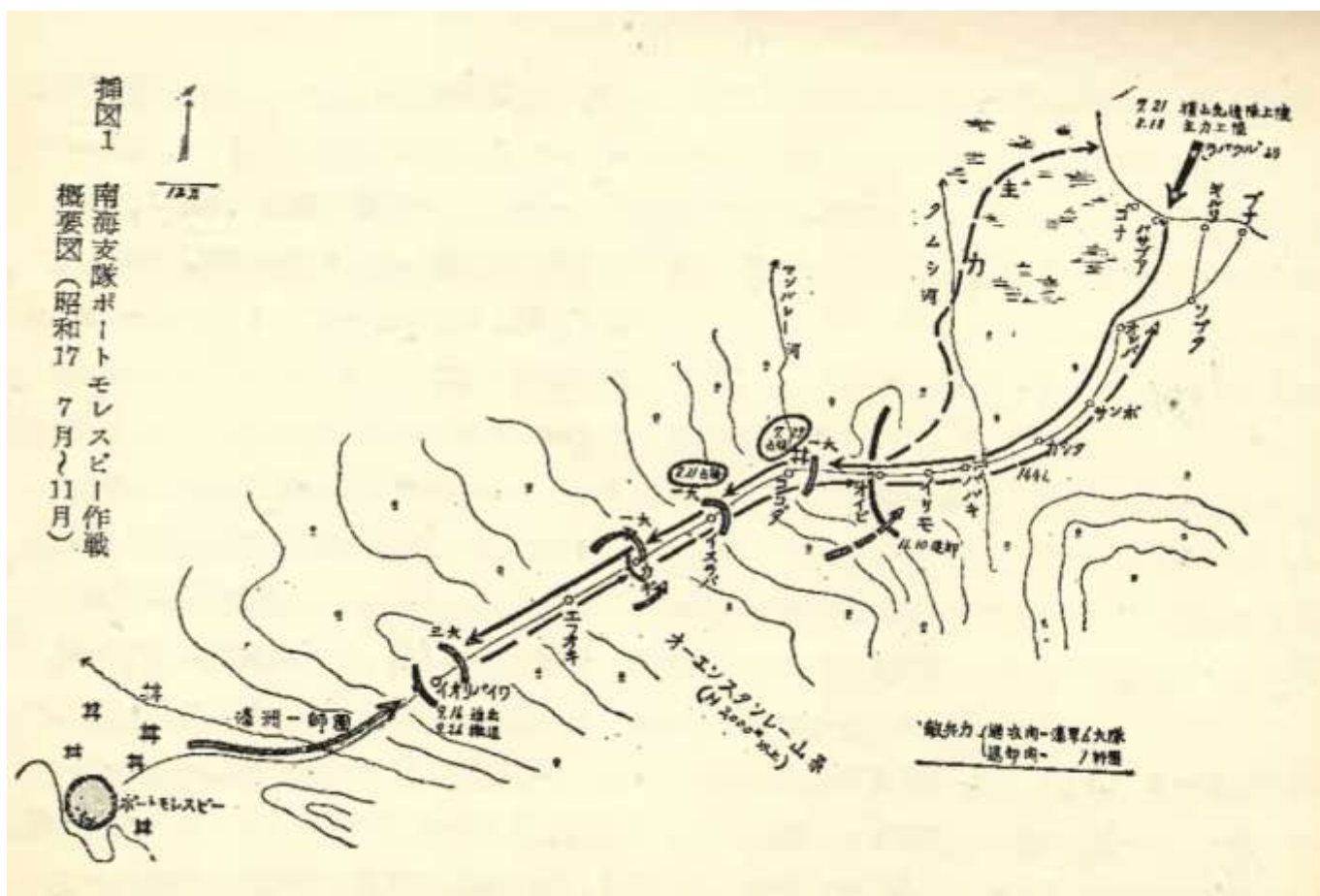
【調査の状況】

今回の調査地は、エオラクリークの上部戦場と言われるところで南海支隊が撤退時に豪軍と戦闘を行ったオーエンスタンレー山脈頂上のやや北側で、標高 1,600m から 2,000m の場所でした。道はなくジャングルなのでヘリで近くに降着、そこから調査地の近くまで歩き、やや海闊したところにテントを設営、キャンプ地としました。これを拠点に 4 日間、周囲の戦闘陣地らしき場所を、必要に応じ、現地住民の協力を得ながら調査しました。落ち葉が分厚く堆積していましたが、やや窪地になった所は蛸壺、また人工的に見える地形の段差などは戦闘陣地の一部と推定し、標識をつけ、GPS ロガーで緯度経度を記録する作業を実施しました。標識の数は 141 個となり、次回訪問時は、これらを基準に本格的な陣地の掘削作業を行う予定です。

今までの遺骨収集作業は、戦地での埋葬箇所の掘削、現地の戦没者墓地からの遺骨収集、現地人の収集した遺骨の受領などがほとんどであり、宿泊はホテルか民泊でしたが、今回は、現地の人さえほとんど足を踏み入れない場所でのテント生活であり、過去の収集事業とは全く異なる厳しい環境での作業でした。



東部ニューギニアの位置
 赤道のやや南、雨季と乾季があり一年中常夏
 高地はやや寒い、日本との時差は1時間
 ラバウルはビスマルク諸島のニューブリテン島の北端に位置する。



南海支隊のポートモレスビー作戦概要図

イオリバイワまで進出し撤退とあるが一部もっとポートモレスビーに近いマクドナルドコーナーまで偵察を行い、日本軍の砲兵将校の斥候1名が戦死している。



ヘリからオーエンスタンレー山脈の景観
このような地域の作戦は極めて困難であったことが窺われる。



ポートモレスビー空港からヘリ1機がやっと着陸できる
サイトへ到着



ヘリサイトからジャングルの中をキャンプ地に向かう



斜面が緩やかで開闊した場所にキャンプ地を設定

ブルーシートを張り、その下に個人用テントを設営



調査の様子、陣地らしき場所に標識を付し GPS ロガーに記録



周辺で見つかった遺留品

水筒、戦闘靴、銃器、弾薬、鉄帽など住民が見つけたものを集めておいてくれたもの。



調査中偶然見つかった頭骨の一部、次回掘削までビニール袋に入れ地中に埋設



最後に PNG 政府関係者 4 名、警備派遣警察官 2 名、通訳 1 名、現地役務 20 名全員で集合写真

エピソード



ヘリから眺めたココダの南海支隊の慰霊碑
海岸のゴナ、ブナからココダまではやや平地でここから山間部へ入っていく。
南海支隊は退却時もここに集結しさらに海岸方向へ後退した。



現地の村に着陸する機会があり子供達と一緒に写真を撮った。子供は世界中どこでも天真爛漫

訪問して現地の状況が理解できた。日本軍が上陸した時はまさに鉄の無い生活、つまり石器時代であり、着るものは腰布程度で文明とはほど遠い生活であったと記されている。

山間部の部落は小さく、数世帯から数十世帯であり、各村は狭く険しい道を徒歩で行き来しなければならず川は急流で豪雨で氾濫するため渡渉は制限され、分断孤立状態で交流は今でもあまり盛んではない。言語は700余に分かれているというのも納得できる。



村の老人と、年配の方は尊敬されている。



博物館と称する小屋には村人が発見した銃・弾薬が集められていた。